

『切腹』

1962 年／日本／小林正樹監督作品

武士における理窟と人情

会員 安部 慶彦 (69 期)

ここ最近で心に残る映画といえば「名探偵ピカチュウ」一択であるが、感想を言おうにも二言目には「ピカチュウかわいい」となってしまう、およそ実のある感想を書けそうにもない。というわけで「名探偵ピカチュウ」は諦めて、「切腹」を紹介したいと思う。

「切腹」は、1962年に公開された日本映画界の名作である。白黒映画が主流であった時代の映画であるが、そこで描かれたテーマは今なお普遍である。

この映画のあらすじはこうだ。寛永7年(1630年)、江戸市中では食い詰めた浪人が大名屋敷に押しかけ「このままでは生き恥を晒すだけだから、玄関先で深く腹掻っ捌いて切腹したい」などと迫り、なにがしかの金品を巻き上げる、現代の強請屋も真っ青な手法が「流行って」いた。そんな中、名門井伊家にも津雲半四郎と名乗る浪人が井伊家で切腹したいと訪ねてきた。そこで、井伊家家老の斉藤勘解由は、同じように同家を訪ねてきた千々岩求女という浪人の話を聞かせる。求女は、半四郎と同じく井伊家で切腹したいと申し出た浪人であったが、当然、彼には切腹する心積もりなど毛頭ないし、それは求女の応対をした勘解由ら家臣も全員心得ている。しかし、このような浪人に手を焼いていた勘解由らは、本当に求女に切腹させるべく、同家の庭を貸し与える。求女は、武士としての面目もありこれを断ることができない。そこで切腹の直前、せめて一両日の猶予が欲しいと勘解由に申し向けるが、勘解由は、武士である以上二言はないとしてこれを受け入れない。さらに、求女は「武士の魂」である刀までも質に入っていたため、脇差は竹光であったが、求女に対

してこの竹光で切腹するよう命じる。覚悟を決めた求女は遂に竹光で切腹を始めるも、それは凄まじい苦痛である。求女は介錯を求めるが、介錯人は意図的に介錯を遅らせ、更なる苦痛を与える。勘解由は半四郎にこの話を聞かせることで切腹を諦めさせようとしたのであるが、半四郎の決意は動かない。そこで、求女が切腹をした庭で半四郎に切腹させることとしたが、切腹の直前、半四郎が「身の上話」を始める。

この映画の主題は、外面を重視し、時に残酷を強いる武士道への強烈な批判である。半四郎が「所詮、武士の面目などと申すものは、単にその上辺だけを飾るもの」と述べることに表れている。しかしこの映画からは、我々が縛られる世間体や、個々人の事情を無視した形式論に対する鋭い批判をも読み取ることができる。

法律家は、時に、当事者の感情を顧みない形式論により事案の解決を図らざるを得ないことがある。しかし半四郎は、形式論(武士道)に則ることではなく、その中で多少なりとも求女の事情を聞いてやらなかったこと、お互いにより良い解決策がなかったかどうかを顧みもしないことを責めているのである。半四郎が「いかに武士とはいえ、所詮は血の通う人間」というように、法も社会も、人間が作ったものであることを忘れてはならないことを改めて思わせる。

この映画を見終えて、我妻榮「法律における理窟と人情」(1955年、第2版、日本評論社)の読後感を思い出した。法律家にとって大切なものも伝えている作品であるように思う。